

● 20世紀メディア研究所・特別研究会—CIA と緒方竹虎

以下の3名は2008年4月から9月、アメリカ国立公文書館でCIA公開資料を収集し、1年間をかけてその分析に共同であたってきました。今回報告するのは、緒方竹虎関係のファイルです。コードネームや伏せ字が多く、解読は難航しましたが、ファイルの特性をある程度把握することができたと考え、その中間報告をいたします。緒方がいつ、どのようにCIAとかかわったのか、そしてなぜCIAからコードネームを付与されたかの分析結果を報告し、皆さまのご教示、ご批判をたまりたいと思います。

日時	2009年7月25日(土) 午後2時～5時	司会	吉田則昭(立教大学)
序論	情報公開、OSSからCIAへ		山本武利(早稲田大学)
総論	CIAファイルの中での緒方ファイル		加藤哲郎(一橋大学)
各論			

- 1、 緒方竹虎とCIAとの接触—新聞・インテリジェンス経験者として 山本武利
- 2、 CIAアレン・ダレスの52年末訪日とその帰結 加藤哲郎
- 3、 緒方竹虎のCIA関係急接近—コードネーム・ポカポンの55年誕生を読み解く
吉田則昭
- 4、 急死直前のCIAの緒方関係評価報告 山本武利

- その模様は、翌7月26日の『毎日新聞』で、1面トップ、2面解説の大きな記事として報道された。正確かつ丁寧な報道記事で、政局との関わりも正確な引用と解説で保守合同につないでいた。ただし1点、米側の吉田茂・緒方竹虎との面談は、52年12月「27日」ではなく「26日」であったが、これは研究会での加藤の報告レジメに「27日午後」と、12月26日午後会見についての27日付け報告書を誤記した誤りで、毎日新聞ではなく、加藤総論報告の誤りであった。ここに訂正しておく。

★ CIA:緒方竹虎を通じ政治工作 50年代の米公文書分析 (『毎日新聞』2009年7月26日朝刊)

<http://mainichi.jp/select/today/news/20090726k0000m030117000c.html>

1955年の自民党結党にあたり、米国が保守合同を先導した緒方竹虎・自由党総裁を通じて対日政治工作を行っていた実態が25日、CIA(米中央情報局)文書(緒方ファイル)から分かった。CIAは緒方を「我々は彼を首相にすることができるかもしれない。実現すれば、日本政府を米政府の利害に沿って動かせるようになる」と最大級の評価で位置付け、緒方と米要人の人脈作りや情報交換などを進めていた。米国が占領終了後も日本を影響下に置こうとしたことを裏付ける戦後政治史の一級資料と言える。

山本武利早稲田大教授(メディア史)と加藤哲郎一橋大大学院教授(政治学)、吉田則昭立教大兼任講師(メディア史)が、05年に機密解除された米公文書館の緒方ファイル全5冊約1000ページを、約1年かけて分析した。

内容は緒方が第4次吉田内閣に入閣した52年から、自由党と民主党との保守合同後に急死した56年までを中心に、緒方個人に関する情報やCIA、米務省の接触記録など。

それによると、日本が独立するにあたり、GHQ(連合国軍総司令部)はCIAに情報活動を引き継いだ。米側は52年12月27日[26日、加藤訂正]、吉田茂首相や緒方副総理と面談し、日本側の担当機関を置くよう要請。政府情報機関「内閣調査室」を創設した緒方は日本版CIA構想を提案した。日本版CIAは外務省の抵抗や世論の反対で頓挫する

が、CIAは緒方を高く評価するようになっていった。

吉田首相の後継者と目されていた緒方は、自由党総裁に就任。2大政党論者で、他に先駆け「緒方構想」として保守合同を提唱し、「自由民主党結成の暁は初代総裁に」との呼び声も高かった。

当時、日本民主党の鳩山一郎首相は、ソ連との国交回復に意欲的だった。ソ連が左右両派社会党の統一を後押ししていると見たCIAは、保守勢力の統合を急務と考え、鳩山の後継候補に緒方を期待。55年には「POCAPON (ポカボン)」の暗号名を付け緒方の地方遊説にCIAスタッフが同行するなど、政治工作を本格化させた。

同年10～12月にはほぼ毎週接触する「オペレーション・ポカボン」(緒方作戦)を実行。「反ソ・反鳩山」の旗頭として、首相の座に押し上げようとした。

緒方は情報源としても信頼され、提供された日本政府・政界の情報は、アレン・ダレスCIA長官(当時)に直接報告された。緒方も55年2月の衆院選直前、ダレスに選挙情勢について「心配しないでほしい」と伝えるよう要請。翌日、CIA担当者に「総理大臣になったら、1年後に保守絶対多数の土台を作る。必要なら選挙法改正も行う」と語っていた。

だが、自民党は4人の総裁代行委員制で発足し、緒方は総裁になれず2カ月後急死。CIAは「日本及び米国政府の双方にとって実に不運だ」と報告した。ダレスが遺族に弔電を打った記録もある。

結局、さらに2カ月後、鳩山が初代総裁に就任。CIAは緒方の後の政治工作対象を、賀屋興宣(かやおきのり)氏(後の法相)や岸信介幹事長(当時)に切り替えていく。

加藤教授は「冷戦下の日米外交を裏付ける貴重な資料だ。当時のCIAは秘密組織ではなく、緒方も自覚的なスパイではない」と話している。【「アメリカよ」取材班】

【ことば】緒方竹虎

1888年山形市生まれ。1911年早稲田大学卒業後、朝日新聞社入社。政治部長、編集局長、主筆を経て副社長。2・26事件で同社を襲った陸軍将校と対峙(たいじ)し名をはせた。国家主義者の頭山満や中野正剛らと親交があり、戦争末期に中国との和平を試みた。44年社主の村山家と対立し辞職。政界に転じ、小磯、東久、内閣で情報局総裁。46年公職追放、51年解除。52年に吉田首相の東南アジア特使となり自由党から衆院議員当選。吉田内閣で官房長官や副総理を務めた。保革2大政党制や再軍備が持論で、54年に保守合同構想を提唱、自由党総裁に。55年11月の保守合同後、自由民主党総裁代行委員。56年1月死去。

◇解説「米の影響下」鮮明 日ソ接近防ぐ目的

CIAの「緒方ファイル」は、戦後の日本政治が、東西冷戦の下、水面下でも米国の強い影響を受けながら動いていた様を示している。米情報機関が日本の首相を「作り」、政府を「動かせる」という記述は生々しい。

CIAが日本で活動を本格化したのは、サンフランシスコ講和条約・日米安保条約が発効した52年からだ。米国では翌53年1月、共和党のアイゼンハワー政権が誕生。同7月の朝鮮戦争停戦を受け、新たなアジア戦略を打ち出そうとしていた。

それがCIAの積極的な対日工作を促し、日ソ接近を防ぐ手段として55年の保守合同に焦点をあてることになった。当時の日本政界で、情報機関強化と保守合同に特に強い意欲を持っていた緒方にCIAが目をつけたのは当然でもあった。

ただ、CIAの暗号名を持つ有力な工作対象者は他にもいた。例えば同じ時期、在日駐留米軍の施設を使って日本テレビ放送網を創設するため精力的に動いていた正力松太郎・読売新聞社主(衆院議員、初代科学技術庁長官などを歴任)は「PODAM (ポダム)」と呼ばれていた。加藤哲郎・一橋大学院教授(政治学)によると、「PO」は日本の国名を示す暗号と見られるという。また、山本武利・早稲田大教授(メディア史)は「CIAは、メディア界の大物だった緒方と正力の世論への影響力に期待していた」と分析する。

暗号名は、CIAが工作対象者に一方的につけるもので、緒方、正力両氏の場合、いわゆるスパイとは異なるが、CIAとの関係は、メディアと政治の距離も問いかける。

時あたかも、政権交代をかけた衆院選が1カ月余り後に行われる。自民党結党時の政界中枢にかかわる裏面史が、この時期に明るみに出たのも因縁めく。また、自民党に代わり政権を担おうとしている民主党が、ここに来て、対米政策を相次いで見直したのは、日本の政界が、政党の新旧を問わず、半世紀以上前から続く「対米追随」の型を今なお引きずっているようにも見える。【後藤逸郎】

毎日新聞 2009年7月26日 2時30分

The Daily Mainichi, July 27, 2009

Declassified CIA documents reveal plan to elect U.S. sympathizer as PM following occupation

A declassified U.S. document has shown that the Central Intelligence Agency (CIA) attempted to make key conservative politician Taketora Ogata Japan's prime minister in the 1950s, in a bid to place the nation under U.S. control.

The document describes a plan by the CIA to make Ogata – former leader of the Japan Liberal Party, who played a leading role in merging conservative parties into the Liberal Democratic Party (LDP) in 1955 – the prime minister, adding that it would allow the United States to manipulate the Japanese government to suit its interests.

Waseda University Prof. Taketoshi Yamamoto, Hitotsubashi University postgraduate school Prof. Tetsuro Kato and Rikkyo University instructor Noriaki Yoshida took a year to analyze the five-volume, 1,000-page CIA document declassified in 2005.

Called "The Ogata File," it details personal information on Ogata as well as the records of CIA and the Department of State officials' contact with him from 1952, when he joined the fourth Cabinet of then Prime Minister Shigeru Yoshida, to 1956, when he died.

U.S. officials met with then Prime Minister Yoshida and Ogata, who served as deputy prime minister, on Dec. 27 26, 1952 and urged Japan to set up its own intelligence organization. The plan failed after meeting stiff opposition from the Foreign Ministry and the public, but still won influence for Ogata with the CIA.

Ogata, an advocate of a two-party system who was widely viewed as a possible successor to Yoshida, subsequently became leader of the Japan Liberal Party. As the proponent of the merger of conservative parties into a single entity, he was also expected to be the first president of the LDP.

Then Prime Minister Ichiro Hatoyama, who headed the Japan Democratic Party, was enthusiastic about resuming diplomatic relations with the Soviet Union. However, the CIA, which believed that the Soviet Union was trying to help the Leftist Socialist Party and the Rightist Socialist Party into a single party, viewed it an urgent task to integrate conservative forces. The CIA thought Ogata was most suited to be Hatoyama's successor, and dispatched agents to accompany Ogata – codenamed "POCAPON" – on his regional campaigns in 1955.

Operation POCAPON ran from October to December of that year, during which agents contacted Ogata on a weekly basis and attempted to make him prime minister as symbol of anti-Soviet and anti-Hatoyama forces. In

turn, the CIA came to rely on Ogata as a source of information on the Japanese government and political world. Information provided by Ogata was passed on to then CIA Director Allen Welsh Dulles.

Shortly before the House of Representatives election in February 1955, Ogata asked CIA agents to tell Dulles not to worry about the outcome of the race. He promised to a CIA agent shortly afterwards that he would lay the groundwork for conservatives to gain an absolute majority in both houses of the Diet within a year if he became prime minister. He added that if necessary, Japan would revise election legislation.

However, the LDP adopted a collective leadership system when it was launched in November 1955. Ogata was unable to become leader of the party, and died in January 1956.

The CIA commented that Ogata's death was unfortunate for the governments of both Japan and the United States. There is a record showing that Dulles sent a telegram of condolence to Ogata's bereaved family.

Hatoyama finally became the first president of the LDP two months after Ogata's death. The CIA then targeted Okinori Kaya, who later served as justice minister, and then LDP Secretary-General Nobusuke Kishi, who subsequently became prime minister.

"It's an important material that shows the circumstances surrounding Japan-U.S. diplomacy during the Cold War," Prof. Kato said. "The CIA wasn't a secret organization at the time. Nor was Ogata a convinced spy."

[Click here for the original Japanese story](#) (Mainichi Japan) July 27, 2009

- 以下に特別研究会における加藤の総論・各論報告と公開資料を、インターネット上でも公開する。ただし訳文は仮役であり、著作権は加藤に属する (©Tetsuro KATO)

総論 CIA ファイルの中での緒方ファイル 加藤哲郎（一橋大学）

【CIA 緒方ファイル解読の学術的意味】

● 米国国立公文書館[NARA]米国中央情報局[CIA]「ナチス・日本帝国政府戦争犯罪情報公開法による第二次公開個人別ファイル」(“Second Release of Name Files Under the Nazi War Crimes and Japanese Imperial Government Disclosure Acts” Record Group263、2005年機密解除、2007年1月一般公開)中の緒方竹虎ファイル。他にFBI/MIS/OSSファイル多数が索引つきで整理・公開された。ドイツ中心。

<http://www.archives.gov/press/press-releases/2007/nr07-47.html>

<http://www.archives.gov/iwg/japanese-war-crimes/>

<http://www.archives.gov/iwg/declassified-records/rg-263-cia-records/>

● 第一次公開 788 人（日本人名は土肥原賢二、今村均、石井四郎、大川周明の 4 人のみ）。圧倒的にドイツ・ナチス関係が多い。アルファベット順（Hitler の直前に Hirohito Higashikuni）。

● 第二次公開約 1100 人（日本人らしい名前は、秋山浩、有末精三、麻生達男、福見秀雄、五島慶太、服部卓四郎 2 冊、東久邇稔彦、昭和天皇裕仁、今村均、石井四郎、賀屋興宣、岸信介、児玉誉士夫 2 冊、小宮義孝、久原房之助、前田稔、野村吉三郎、緒方竹虎 5 冊、大川周明、小野寺信 2 冊、笹川良一、重光葵、下村定、正力松太郎 3 冊、Shima Horia 2 冊、辰巳栄一、辻政信 3 冊、和知鷹二、和智恒蔵の 29 人 41 冊）。おおむね戦犯、ないしその容疑者だが GHQ-G2 歴史課等に協力し訴追を逃れた人物の個人ファイル（小宮だけ例外、上海自然科学研究所の左翼関係）。

● 「緒方ファイル EEZ18-B96-RG263, CIA Name File, box 94&95, folder: Ogata Taketora」は 5 分冊あり、日本人の CIA 個人ファイルでは群を抜いて大きい。File 1（約 30 点）、File 2-1（約 77 点、1952 年→1955 年の部局間相互参照フォーム CROSS REFERENCE FORM が多く、重要性に応じて移動させたため？）、File 2-2（英文書物 3 点、中国関係）、File 3（約 103 点）、File 4（約 65 点・英文論文 5）、File 5（約 56 点、工作関係・英文論文）と区分された全 5 分冊、約 350 点 1000 頁近くである。

● こうした CIA 機密解除ファイルでは、重要人名・機関名が消されて(伏せ字)になり、暗号・コードネームで語られている場合が多い。有馬哲夫教授は、正力松太郎のコードネーム PODAM を見出し正力と CIA、日本テレビ、原子力平和利用の関係を解明したが、「緒方ファイル」は、日本政治の中枢に関わるファイルであり、アレン・ダレス CIA 長官が要所要所で登場する。正力や岸信介の背後で暗躍した『ニューズウィーク』編集長ハリー・カーンら「ジャパン・ロビー」は、「緒方ファイル」では、今のところ登場しない。オーソドックスな政治工作で、大きな私的資金援助は今のところ確認できない。

● そこで緒方は多くは本名で語られるが、1955 年後半期のように、POCAPON ポカポンというコードネームで登場する場合もある。こうした暗号文書では、名前を消された部分を再現するのはきわめて困難であり、POCAPON 以外のコードネームの解読も一部しかできていない。われわれが「緒方ファイル」から解明できたのは、POKAPON=Ogata Taketora、KUBARK=CIA、ASCHAM=Allen Dulles、ODOYOKE=米国政府、POGO=日本政府、等であり、頻出する PO は、AE

- Soviet Union、AM - Cuba、BE - Poland、DN - South Korea、SM - United Kingdomのような、日本の国名コードであろう

● ただしCIA文書でコードネームを持つことが、自覚的エージェントや金銭供与を受ける情報提供者というわけではない。CIAの側が、重要人物について勝手に命名し、情報機関内部で連絡しあうさいの暗号にしているケースが多く、緒方竹虎についていえば、自分自身がポカポンと名付けられていたことを自覚している形跡のある文書は見あたらない。ましてや「スパイ」ではありえない。むしろ「CIAの特定工作・作戦目的にとって格別に有益な(情報が得られる)ターゲット」という意味で、ただちに「CIAの手先」とか「売国スパイ」という存在ではない。この点誤解ないように。

● 抹消された空白伏せ字部分の人名・作戦名等を埋めるのはさらに難しく、われわれは、鹿地亘やアメリカ側要人など何人かを推定できたにすぎない。その意味では今回は中間報告にすぎず、読者からの情報提供でこれから解明さるべき秘密文書の一部公開にすぎない。

● ジャーナリストによる仕事でも、春名幹男『秘密のファイル』上下（共同通信社、2000年）に続いて、2008年11月、ティム・ワイナー『CIA秘録 その誕生から今日まで』上下（原著2007年、文藝春秋刊）が刊行され、対日工作について関係者名を挙げて公文書館記録が解読されている。「緒方ファイル」はこれらをも参照し検討することでその全体像が浮かび上がるであろう。

★参考：これまでのCIA個人ファイルからの報道（2009/7/24 朝日新聞報道については別途補論で検討）

- ・ドイツ国営テレビ 2008年放映「児玉機関と笹川良一」<http://ameblo.jp/aobadai0301/entry-10281193928.html>
- ・サンケイ 07/02/19「石井四郎関係」<http://www.archives.gov/iwg/>
- ・共同 06/08/20「旧軍人日本地下政府・河辺機関」<http://www.asyura2.com/0601/senkyo26/msg/110.html>

★日本人ファイルに登場するCIA暗号名 (cryptonym) 一覧

KUBARK=CIA headquarters,

ASCHAM=Allen DULLES (James Srodes, ALLEN DULLES, Master of Spies, Regnery, Washington DC, 1999, pp. 431-432.)

ODACID=United States Department of States/U.S. Embassy

ODOPAL=United States Army Counterintelligence Corps

ODYOKE=Federal Government of the United States

POGO=PO Japanese Government 日本政府

POCAPON=緒方竹虎 1955年5月29日初出

PODAM=正力松太郎

PODALTON=「(正力) マイクロ波通信網建設支援工作 (1953年11月7日)」【有馬2008:248】

POHALT=柴田秀利

POJACPOT/1=正力松太郎 → 正力ファイル「履歴ファイル」冒頭に cryptonym あり。

POSONNET/1=賀屋興宜「履歴ファイル」冒頭に Pseudonym あり。1959年8月6日初出

SR REP senior representative、具体的には当時のCIA北アジア地域上級代表

【未解明】

Conweck, POROW (未解読、緒方1955「福岡同行記」に登場)

POUCH POAIM/12 (和知鷹二?)

DYCLAIM [CIA?]

DYMACAO [FBI?]

JAMI

JCU [CIA 東京支局?]

POYAMA

PODIUM

PORTICO

POPOV(辰巳栄一・服部卓四郎・河辺虎四郎・有末精三・辻政信ファイルに頻出、児玉誉士夫?)

PO?ERPLANT

IDEN

KAPOK

KUJUMP

KUTWIN

ODIBEX (国務省?)

POLESTER/5 (鹿島宗二郎?) BABOOM

POLUNATE (内閣調査室?)

POPALATE (日本版 CIA?)

Lauricle (公聴?)

STBRANT/1 (麻生達男?)

KMCASHIR

- CIA cryptonym 暗号表については、以下のサイト参照。

http://en.wikipedia.org/wiki/CIA_cryptonym

http://www.bambooweb.com/articles/c/i/CIA_cryptonym.html

http://www.indopedia.org/CIA_cryptonym.html

http://www.maryferrell.org/wiki/index.php/CIA_Cryptonyms

- この期の CIA の活動の中核部分は、ワイナーが主たる典拠とした国務省 FRUS 文書「**Foreign Relations, 1950-1955 The Intelligence Community**」等でも知ることができる。索引の日本人は鹿地亘のみ。

<http://www.state.gov/r/pa/ho/frus/index.htm>

<http://www.state.gov/r/pa/ho/frus/truman/c24687.htm>

<http://www.state.gov/documents/organization/69042.pdf>

<http://www.state.gov/r/pa/ho/frus/c4035.htm#eisenhower>

【緒方ファイルの概要】

「CIAには政治戦争を進めるうえで、並外れた巧みさで使いこなせる武器があった。それは現ナマだった。CIAは1948年以降、外国の政治家を金で買収し続けていた。しかし世界の有力国で、将来の指導者をCIAが選んだ最初の国は日本だった。」【ワイナー(上)2008:177、ただし、ワイナーでは岸信介のこと、本当にmoneyが中心か?】

- 「緒方ファイル」の文書日付は、おおむね1952年から1957年までのものとなっている。戦前から1950年初頭までの緒方の記録はほとんどない。占領期、GHQのマッカーサーは、CIAをその草創のころから嫌い、信用していなかった。1947年から50年まで、東京のCIA支局を極力小さく弱体にし、活動の自由も制限していたといわれる。ただし元共同通信ワシントン支局長春名幹男は、われわれ以前に米国国立公文書館文書等を丹念に読み解き、アラン・ブルームを長とするCIA東京支局が1948年夏には活動を始めていたことを、『秘密のファイル』で実証的に明らかにした。

- 「緒方ファイル」の対象時期は、アメリカで民主党トルーマンから共和党アイゼンハワーへの政権交代があり、アイク政権の国務長官にジョン・ダレス、CIA 長官に弟のアレン・ダレスが任命され、後に対立したとされる国務省と CIA がトップレベルで緊密に連携できた時期。朝鮮戦争のさなかにサンフランシスコ講和条約・日米安保条約が結ばれ、独立した日本で保守・革新が再結集し、保守合同＝自由民主党結成＝55年体制が始まる時期。米国の対日情報活動も、マッカーサー、ウィロビーのGHQ・G2からCIAへと受け継がれ、転換された。「緒方ファイル」は、それをCIAの側から、また中国問題に詳しい有力アクターであった緒方竹虎の側から、照射する。
- 「緒方ファイル」のFile 1冒頭には、緒方の個人調書ファイルが綴られており、「リスト201」(RIセクション＝調査局?)と名づけられた資料には、緒方の暗号名(cryptonym)である「ポカポン(POCAPON)」が、そして写真(1954年、1955年のもの)も添えた、いわば「身上書」的文書が綴られる。「緒方ファイル」中でもFile 1及びFile 5には、緒方のCIAにおける暗号名ポカポンPOCAPONが出てくる。ちょうど、有馬哲夫教授が「正力ファイル」に正力のCIAコードネームPODAMが見出したように。緒方の個人情報の関係では、本人の経歴に関するもののほか、三男の緒方四十郎氏(1927年生、元日銀理事)の名前も、時々登場する。
- CIAの機構組織と行動パターンは、一般的に言って、米国ワシントンのヘッド・クォーターでの分析と、その現地工作(Operation)の実施部隊報告に大別できる。現地とワシントンの電信交信、その転電、部局間の相互参照(クロスリファレンス)が前者であり、現地での一次情報(関係者による聞き取り情報など)は後者である。前者には当時の日本における緒方とCIAの接触、その会話などを記録した「現地レポート(CONTACT REPORT)」、特にワシントンのベデル・スミス、アレン・ダレス長官まで報告され指示された資料がある。後者に1955年9月以降、急死直前の翌年1月までPOCAPONとの十数回の接触が試みられた「会話記録」(CHRONOLOGICAL NARRATIVE ACCOUNT)がある。
- 後に詳述するが、CIAが緒方に接近した必然性とは、第一に、日本版CIA＝内閣調査室拡充構想、第二に、保守合同と「日ソ交渉」を含めて首相ポストが目前だったことであろう。特に1955年は、次期首相の有力候補だった緒方を「反ソ・反鳩山」と見立て、緒方に食い込むことで緒方を首相の座に押し上げようとした。ただしそれは、1956年1月の緒方の急死により挫折する。
- なお、われわれは、いわゆる旧ソ連秘密ファイル中の「緒方竹虎ファイル」37件(ロシア国立社会政治史公文書館RUGASPI所蔵文書番号f.495, op.280, d.385)も参照し、冷戦史の観点から戦後日本の意味を再構成するが、旧ソ連共産党・KGBも関わったソ連側資料は、この期の緒方の重要性を理解しているとは思えない、タス通信報道中心の政治記録である。
- もっとも、ワイナーも「灰の伝説」と記すように、CIAの当時の機構組織、実力を過大評価し、即断することは禁物であろう。以下、われわれは徹底的に第一次資料に即して、緒方竹虎とCIAの関係を探ってみる。(お問い合わせは、加藤 katote@ff.iiij4u.or.jp へ)
- 補論 CIA個人ファイルの扱い方――ジャーナリズムは、いかに報じてはならないか
 - 1 CIA個人ファイルは、多くの個人情報を含み、当人は亡くなってもご遺族・関係者が存命している場合が多いので、その研究上・報道上の使用には、最大限・細心の注意を要する。
 - 2 個々の文書・記述については、当該文書の可能な限り完全な解読と、その時代背景・歴史的な文脈の理解が不可欠であり、それを怠ると、大きな誤解や人権侵害・報道被害に及ぶことが

ある。また文書の全体的性格を吟味せず、一部分・片言隻語のみが紹介・報道されると、個人についての誤った印象・イメージを与えかねない。可能な限り全文ないし文脈全体がわかるような紹介・引用・報道が望ましい。

3 CIA(MIS/FBI/OSS等も、旧ソ連・東欧秘密資料でも)個人ファイルは、あくまでCIA側が収集し、半世紀以上隠匿してきた資料である。自覚的エージェントや情報提供者であっても、その内容にアクセスすることはできなかった。登場する人物の圧倒的多数は、自分が監視されファイルされていることを知らずに記述されている。しかもその内容は、交友関係や一般情報が圧倒的で、他人の告げ口や噂話、対敵操作情報も含まれるため、事実そのものを歴史的に検証して、情報の真偽を確定する手続きが不可欠である。

4 CIA「緒方竹虎ファイル」で言えば、歴史的に2番目に古い、1945年10月7日に獄中の日本共産党徳田球一が国務省ジョン・エマーソン[とハーバード・ノーマンの民間情報局CISファイル]に対して行った日本の秘密結社に関する陳述中の玄洋社についての説明、玄洋社の背後に黒龍会があり、東久邇内閣書記官長の緒方竹虎が「玄洋社のPresidentだった」という部分、「朝日新聞は日本における最も反動的な新聞として知られ、玄洋社と密接な関係があった」と語った部分(緒方ファイル1, File番号消去、Transmitting report of interrogation of Kyuichi TOKUDA, Japanese Communist Leader recently released from prison, 19 Oct 1945, 1955.9/6再録)が繰り返しくロス・レフェレンスで用いられ、この情報が、1956年の死まで、緒方の経歴上の「汚点」として扱われた。

以下の『朝日新聞』7月24日報道には、いくつかの問題点がある(口頭)。

★ 「日本版CIA」50年代に構想 緒方竹虎が米側と接触(『朝日新聞』東京版7月24日)

<http://www.asahi.com/national/update/0724/TKY200907230394.html>

1950年代、内閣官房長官などを務めた緒方竹虎氏が、米中央情報局(CIA)の関係者と頻りに接触していたことが、米国立公文書館で公開されたCIAの秘密文書で明らかになった。緒方氏にとっては情報収集を行う国家機関を設立するのが目的だったが、米側は緒方氏を「POCAPON」という暗号名で記し、協力者に位置づけていたことがうかがえる。CIAが保管していた秘密文書で、主に緒方氏の公職追放が解除される51年から56年の死去の後まで。緒方氏は52年10月に衆院選に当選し、吉田内閣の官房長官となった。

同年11月の報告書によると、関係者と面会した緒方氏は、日本の情報活動を拡大する意向を示し、米国の情報機関について説明を求めた。米側は「情報にかかわるすべての国家機関の報告を集約する必要がある」と説明した。

日米両政府は中国など共産圏からの日本人引き揚げ者から、その軍事力や経済情勢に関する情報を聞き出す計画を進め、ひそかに協力関係を深めた。文書によると、54年1月、緒方氏と内閣官房調査室(現内閣情報調査室)の初代室長だった村井順氏が米側の当局者と会食。中国、ソ連からの日本人引き揚げ者の尋問計画について話し合った。

文書は、緒方氏が首相候補として取りざたされる中で、「保守的でソ連圏と政治的親交を持つことはないだろう」と期待を示す記述もあり、55年には本名ではなく、「POCAPON」という暗号名で記すようになっている。

日本の対中政策の観点からCIA文書を調査している神戸大大学院の井上正也講師(外交史)は「55年の保守合同以前から日本の保守政治家に関心を持ち、緒方氏を親米派として育てたいと思ったようだ」と分析。「CIAは『情報提供者』と見ていたようだが、緒方氏自身は単に米側に協力するだけでなく、日本の自立を考えていたと思う」と話している。(川端俊一)

各論2 CIAアレン・ダレスの52年未来日とその帰結 加藤哲郎

FORM NO. 35-85
NOV 1951

CLASSIFIED MESSAGE
INTELLIGENCE

SECRET
SECURITY INFORMATION

IN 23962

1
2
3
4
5
6
7
8

27 DEC 52

TO: DIRECTOR, CIA
FROM: SR REP ()
FE 6
ROUTINE
1020Z 27 DEC 52
INFORMATION: DCI, D/DCI, DD/P 2, FI, FI/OPS

() 9944
TO: DIR INFO: () CITE: ()
INTELL

1. AMBASSADOR WURPHY AND ASCHAM CALLED ON PRIME MINISTER YOSHIDA 1500 HOURS 26 DEC. MEETING LASTED ABOUT 30 MINUTES DURING WHICH NORMAL AMENITIES AND GREETINGS EXCHANGED. YOSHIDA TENDED TO NON-OFFICIAL SUBJECTS ALTHOUGH ON () CASE HE MADE UNCONCERNED AND RELAXED COMMENT TO EFFECT "THAT MATTER IS SUBSIDING", IMPLYING THAT HE DID NOT CONSIDER IT SERIOUS AFFAIR AT THIS TIME.

2. AT 1545 HOURS SAME DAY ASCHAM, () () AND () (AS INTERPRETER) CALLED ON DEPUTY PRIME MINISTER OGATA. MIJARI JUN WAS ALSO PRESENT. MEETING TOOK PLACE WITH HIGH DEGREE CORDIALITY DISPLAYED BY OGATA. FOLLOWING WERE PRINCIPAL POINTS COVERED:

A. ASCHAM CONVEYED GREETINGS OF DCI AND SEC STATE DESIG-NATE. HE INDICATED OUR GREAT SATISFACTION WITH INTEREST OGATA HAS SHOWN IN INTELLIGENCE FIELD AND OUR HOPE THAT JAP GOVT WILL PUSH ORGANIZATION OF CENTRALIZED INTELL AGENCY. HE MADE SPECIAL MENTION OUR GRATIFICATION OVER JAPANESE PROGRESS IN () FIELD (PROJECT

SECRET
SECURITY INFORMATION

IT IS FORBIDDEN TO MAKE A COPY OF THIS MESSAGE

Pol. JCU Jap Liaison
COPY NO. 2
104524

[資料1] 1952年12月26日午後、アレン・ダレス CIA 副長官、マーフィ駐日大使らと吉田茂首相、緒方竹虎副首相・村井順内閣調査室長、岡崎勝男外相らの会見報告文書

● File. 2-1 : 「FE6: SR REP[北アジア地域上級代表ポール・ブルーム?]から CIA DIRECTOR [Walter Bedell Smith]へ 1952年12月27日, Information:DCI, D/DCI, DD/P2, FI, FI/OPS」

1. マーフィー大使と ASCHAM[アレン・ダレス]は[1952]12月26日15時に吉田首相を訪問。会談は30分ほどで、普通の挨拶を交わし親しく懇談した。吉田は、(鹿地?)事件には興味がない、「その件は沈静しつつある」と穏やかにコメントしながら、非公式の問題に向かった。つまり、彼は(鹿地?)事件をこの時点での重要な問題とはみなしていなかった。

2. 同日15時45分、ASCHAM[アレン・ダレス]と(ポール・ブルーム?)() (:通訳)は、緒方 deputy prime minister 副総理を訪ねた。そこには[内閣調査室長]村井順も同席した。会談は、緒方によって、誠心誠意のもてなしが示された。以下は、言及された主要な点である。

A. ASCHAMは、DCI[= Director of the Central Intelligence Agency = Walter Bedell Smith (53.2からアレン・ダレス)]と SEC STATE[=国務長官 Dean Gooderham Acheson (翌53.1からジョン・ダレス)]の挨拶を伝えた。ASCHAMは、緒方が示したインテリジェンスの領域での関心に対し、われわれは大いに満足していると述べ、日本政府が中央情報機関の組織化を推進するようという、われわれの希望を示した。ASCHAMは、()フィールドにおける(? プロジェクト)日本の進展について、われわれが大満足している旨、特に名を挙げて述べた。

B. 緒方は、日本の情報機関が事実上設立されようとしており、日本政府は、すでに(CIA?)と()から情報を得ている関係でアメリカの助けを必要とし、情報の領域ではアメリカに全面的に協力したいという。緒方は明らかに熱心で、これらの言明は確固としたものであった。彼は、日本の情報活動は、言語的・人種の類似性を持ち今なお日本人が実際に住んでいるアジア地域において、特別な価値を持つであろう、と続けた。

[C項欠——削除ではなく、単純なタイプミスか]

D この後者[アジアでの特別な価値]の点に、ASCHAMは強く同意し、われわれはそうした日本人[the Japanese]に対して、とりわけ共産中国において何が起きているかについての知識を求めている、と続けた。

E (ブルーム?)は、緒方に、[中国の]第3勢力として育成可能なグループに、日本側[Jap]は接触を保持しているのではないかと尋ねた。

F 緒方は、そういうことはないと言明した。彼は、いまや国民党側[chinats]とも中共側[chicom]ともほとんどないし全然交渉のない第3勢力の支援から得られるものはほとんどないだろう、という意見を表明した。彼は、第3勢力の価値は時がたつにつれて減じていくだけだ、と感じている。緒方が言っているのは、(中国国民党とは異なる)第3勢力の公式の公然たる支援のみを語ったと考えられる。しかしながら彼は続けて、共産中国にある程度のアクセスをもつと思われる東南アジアの在外中国人の育成に、より大きな潜在的可能性がある、とも示唆した。彼は、在外中国人は、国民党側、国民党側及び様々な東南アジア諸国の間で、興味深い軸となる位置にある、と指摘した。

G ASCHAMは、この後者の観点に同意しながらも、しかし諜報活動の意味では、いくつかの第3勢力グループと協同して何かを得られる余地があるだろう、と付け加えた。

H 緒方はこの点はコメントしなかった。

I 会見は、全般的に友好的な雰囲気、相互に支援と協力を約束して終わった。

3. 16時30分に ASCHAM と(ブルーム?)はマーフィー大使に招かれ[駐日米国]大使館の茶会に出席した。緒方と岡崎[勝男]外務大臣もゲストだった。岡崎もまた大使と別れる時、プライベート

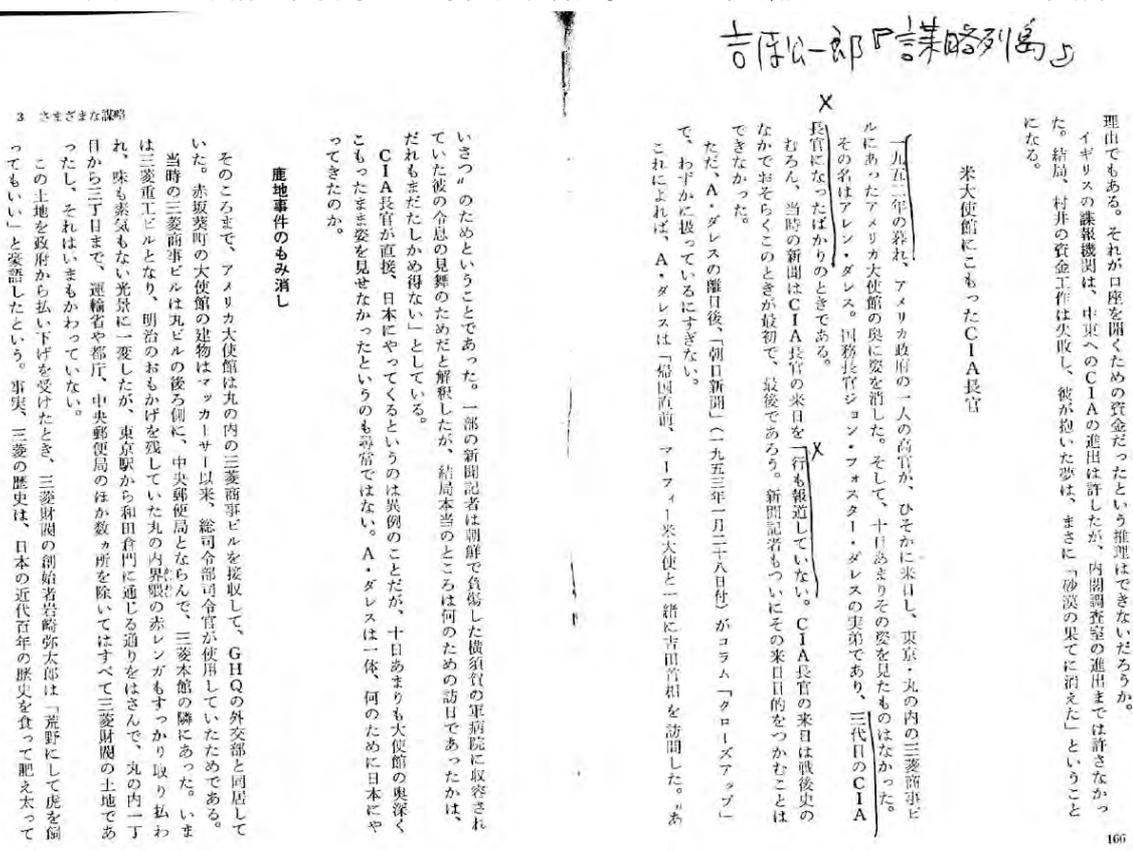
に（鹿地？）事件は沈静しつつあると思うと言った。

4. （ブルーム？）は、ASCHAMの訪問がきわめて重要であったと確信した。日本政府高官と我々の会合は、米国政府の重要な出先機関としての、日本におけるKUBARK[CIA]の地位を、大いに確固たるものにした。この訪問は（鹿地？）事件との関連できわめてタイムリーであり、マーフィー[駐日大使]の、われわれの問題[鹿地事件処理?]に対するすでに示された心強い態度を強めるうえで、きわめて大きな意味を持った。この後者の点は、FEC(Far Eastern Command、極東軍司令部)の立場からも勇気づけられる。

メッセージ終わり

S/Cコメント no para 2c indicated, being service

● これまでの言及：松本清張、吉原公一郎、春名幹男。しかし、解読のキーワードは「政権交代」



(1) ASCHAM というコードネーム、新大統領決定・引継期の公式訪問 (『読売』12/27「人の動き」)

(加藤注) 米国情報機関と吉田茂との関係は、米国国立公文書館MIS(G2)「吉田茂ファイル」を用いた春名幹男『秘密のファイル』第3章・8章に詳しいが、上に紹介した1952年12月26日の吉田茂首相とCIA副長官アレン・ウェルシュ・ダレスの会見記録、及びその直後のアレン・ダレスと緒方竹虎、村井順の会談記録は、鹿地亘・三橋正雄事件が12月初旬に発覚し鹿地は12月10日に国会で証言、鹿地を軟禁したアメリカ軍の正体について、『ニューヨークタイムス』は12月11日の紙面でCIAであると報道した直後であり、かつ、アメリカ大統領選で共和党のアイゼンハワーが勝利し、次期国務長官にアレンの兄で対日講話の立て役者であったジョン・フォスター・ダレスが就任することが決まり、アレン自身もCIA長官に内定していたもとの、きわめて重要な政治的意味を持った。事実、この直後に緒方の内閣調査室拡充案が発表され(朝日12月29日1面トップ「新情報機関の構想成る」)、朝鮮戦争停戦への一つの糸口となる吉田茂と李承晩の日韓トップ会談がセットされた(12月28日朝日1面「李大統領1月5日来日、国連軍司令官クラーク大将招待、12月30日朝日1面トップ「李・吉田会談、国交開始まず期待」)。

文中の暗号名 ASCHAM が、秘かに来日中のアレン・ダレスであることは、当時の朝日・毎日・日経新聞等では確認できないが、12月27日の読売新聞朝刊1面「人の動き」欄に、さりげなく「マーフィー・アメリカ駐日大使は、ジョン・フォスター・ダレス氏の実弟アレン・ダレス氏を伴い、26日午後3時目黒の公邸に吉田首相を訪問懇談した」とあることで確認できる。アレンは、53年1月アイゼンハワー大統領就任と共に、兄のジョンが國務長官に就任したのと同時に、CIA長官に昇任した。

吉原公一郎『謀略列島』166-169頁は、朝日1953年1月28日コラム「クローズアップ」をもとに「1952年の暮れ」アレン・ダレスの「ひそかな来日」に触れているが、「当時の新聞はCIA長官の来日を一行も報道していない」（読売に報道）、「3代目のCIA長官になったばかり」（まだ副長官、53年2月就任）、「最初で最後の訪日」（51年1月ベデル・スミス来日、アレン・ダレスは少なくとも2度目）と誤記し、「鹿地事件のもみ消し」と「新情報機関設立」が目的だったとしている（これは正しい）。

春名幹男『秘密のファイル』上巻203-204頁では、ブルームの執事成松孝安の証言として、アレンの52年12月来日は、長男アレン・メイシー・ダレス中尉が朝鮮戦争で重傷を負ったため、「ダレスは妻クローバーと共に、長男が長期入院した横須賀の米海軍病院の病室につきっきりで詰め、約2週間滞在した。ダレスが病院を離れたのは、ブルームに付き添ってもらって、東京に吉田茂首相を表敬訪問した時だけだった」「ダレスにとって、日本での息子の看病は、プライベートなお忍びだったから、ブルームは、このことを極秘にするよう口止めした」とある。下巻124頁は、ダレス兄弟の緊密な協力を紹介する履歴部分で、「弟アレンは5歳年下で、……第二次大戦中、CIAの前身の戦略情報局（OSS）で活躍。対ドイツ工作や日本の終戦工作にもかかわった。当時、彼の右腕だったポール・ブルームはCIAの初代東京支局長。朝鮮戦争で長男が重傷を負った折り、お忍びで訪日。入院した長男の介抱の合間に、吉田茂とも会った」とする。

吉原の典拠とした朝日新聞1953年1月28日コラム「クローズアップ」は、「ところでこのアレン・ダレス氏が昨年暮、突然東京に現れたことはあまり知られていない」で始まり、「結局本当のところは何のための訪日であったかは、だれもまだたしかめ得ない」と結ばれている。しかし、上記の12月26日会見報告はきわめて具体的であり、「クローズアップ」と同じ1月28日朝日の夕刊トップ記事は「ダレス長官初の外交演説、ソ連・日本を目指す、朝鮮戦もその一環」という「日本を共産陣営のはさみの中に持つてくるのがソ連共産党政府の根本的な目標の一つである」という兄ジョンの重要外交演説であった。

なお、以下の資料でも、ASCHAMがアレン・ダレスのコードネームであることがわかる。

書物 James Srodes, ALLEN DULLES, Regnery, Washington DC, 1999, pp. 431-432.

米国国務省歴史室 Persons and Pseudonyms: Ascham, Robert A., pseudonym for Allen Dulles

<http://history.state.gov/historicaldocuments/frus1952-54Guat/persons>

<http://images.library.wisc.edu/FRUS/EFacs2/1952-54Guat/reference/frus.frus195254guat.i0007.pdf>

ポンドの自由 米英会談へ



イギリス外相、ハントリー、ポンドの自由米英会談へ

ポンドの自由米英会談へ
ポンドの自由米英会談へ

タ・ハ法の修正

タフト氏、上院へ提案

タフト氏、上院へ提案
タフト氏、上院へ提案

仏武蔵野にて帰国

ハンガリーを訪問

ハンガリーを訪問
ハンガリーを訪問

1953.1.28A
ワグネル
米中央新聞局長
アレン・ダレス氏

ワグネル
ワグネル

秘密情報活動に敏腕

対日終戦工作にも努力

対日終戦工作にも努力
対日終戦工作にも努力



Allen Dulles
Allen Dulles

ソ連圏のユダヤ人

ソ連圏のユダヤ人
ソ連圏のユダヤ人

ソ連圏のユダヤ人
ソ連圏のユダヤ人

ソ連圏のユダヤ人
ソ連圏のユダヤ人

(2) アメリカ側出席者 マーフィ駐日大使、P・ブルーム初代東京支局長(H・オバレシュ第2代支局長への引継期)、C・スウィフト初代日本課長? G・ガーゲット DRS (文書調査) 課長?

(加藤注) 春名幹男によれば、CIA 初代の東京支局長はポール・ブルームで48年夏着任、49年から毎週第二火曜日「8人のサムライ」(笠信太郎、松本重治、松方三郎、浦松佐美太郎、東畑精一、蟬山政道、前田多門、佐島敬愛の「国際派・リベラル」)と夕食会(火曜会、53年3月頃まで)、吉田茂とも親しい「CIA 上級代表」として滞日した。52年1月18日・24日のアレン・ダレス CIA 副長官からジョン・アリソン 国務次官補宛秘密メモに「商人を情報エージェントに使用して、中国本土に潜入させる」という吉田茂のアイデアの秘密工作の実行役としてブルームは登場するが、52年8-12月に第二代ハーベイ・オバレシュと交代する(日本、中国、朝鮮半島から東シベリアの北東アジア全域担当でCIA 長官の「特別代表」)。春名は「上級代表」とは東京支局長のことだとみてよい、とする(春名『秘密のファイル』下、111頁)。CIAの初代日本課長はカールトン・スウィフト、1955-58年の極東部長はアルフレッド・アルマー。

1951年にCIAはGHQ/CIC要員を多数スカウトしてDRS(文書調査部)のソ連引き揚げ者調査等に従事。1950年代初めは100-200人(1)CIAワシントン特殊工作部OS0傘下東京支局長ポール・ブルームらは米国大使館で公式にはアタッシュ、ブルームの部下にグレン・ネルソンとアーサー・クラウザー、(2)ジョージ・ガーゲットを長とするDRSの30-40人は日本郵船ビル、大蔵省、林野庁ビルを転々、(3)市ヶ谷旧陸軍士官学校跡に基地パーシング・ハイツ(ハーベイ・オバレシュやスウィフトら30-40人)、(4)横須賀米軍基地内FRU(現地調査部隊、秘密工作担当50-100人、ワシントンの政策調整部OPC傘下で、特殊工作部OS0傘下の他部門と対立)(上344頁)。GHQ/G2と合同特殊工作委員会(JSOB)で連絡するが、JSOBはG2資金でG2主導、ブルームと対立。ポール・ブルームの唯一の翻訳書は松本清張『点と線』1970、講談社インターナショナル。なお、1952年当時の駐日大使マーフィーもOSS出身。

(3) () 事件=鹿地亘事件の後始末、12/6発覚、12/11New York Times 報道「CIAが抑留」

★ 国務省FRUS文書「Foreign Relations, 1950-1955 The Intelligence Community」No. 145, Memorandum From Robert P. Joyce of the Policy Planning Staff to the Deputy Under Secretary of State (Matthews) Washington, January 27, 1953 (G2→CIA引継期の拉致問題、国務省とCIA連携の失敗例として鹿地亘事件とポーランドの事例に言及し連携強化の必要性を説く)

<http://www.state.gov/documents/organization/96783.pdf>

(4) 訪日目的・会見目的・協議内容: 日本政府によるCIA活動の公式認知

— 朝鮮戦争で負傷した息子の見舞い、兄ジョン次期国務次官代理、ベデル・スミス長官代理の表敬

— アジア戦略・朝鮮戦争 「第3勢力」、台湾国民党評価、再軍備・改憲のPro-US Orientation

— CIAと内閣調査室・日本版CIA構想 G2=ウィロビー・旧軍人と異なる近代的中央情報機関創設
— サンフランシスコ講和後の日米関係 吉田茂後継、鳩山阻止のニューリーダー品定め

(5) 1951年1月16日前後、CIA スミス長官・ダレス工作本部長と4月解任前のマッカーサー元帥・ウィロビー将軍が中国参戦後朝鮮戦争下の情報作戦へのCIA参入を東京で協議

★ 国務省FRUS文書「Foreign Relations, 1950-1955The Intelligence Community」No.43 文書(ワイナー『CIA秘録』上、174頁、資料参照)

<http://www.state.gov/documents/organization/96783.pdf>

● 1951年1月16日CIAメモ: ベデル・スミス長官、アレン・ダレス副長官が東京滞在中。マッカーサー、ウィロビーと朝鮮戦争中国参戦に際して協議中(ワイナー上174、ただし典拠は明記していないが、以下のもの)。

● 43. Memorandum From Robert P. Joyce of the Policy Planning Staff to the Ambassador at Large (Jessup) Foreign Relations, 1950-1955, p.82 Washington, January 16, 1951.

SUBJECT

NSC10/3

I think you will find the attached file to be self-explanatory and I believe that you will desire to review it before the Under Secretary considers signing the attached draft memorandum addressed to Mr. James S. Lay, Jr. The following considerations with respect to NSC 10/3 have been suggested to me within the Department:

I have the following comments to make:

1. General Smith and Allen W. Dulles feel that it is necessary at this time to obtain for CIA what is set forth in 10/3. They both feel that they have gone as far as possible in asserting CIA's role vis-à-vis the JCS in Washington and as related to theatre commanders. As long as the present JCS position remains in its present state, nothing further can be accomplished in increasing the responsibility and authority of the CIA particularly in military theatres. As you know, General Smith and Allen Dulles are presently in Tokyo in an endeavor to accomplish something with General MacArthur and General Willoughby which will make it possible for CIA to play some role in the intelligence field in General MacArthur's theatre. (Has his theatre ever been defined geographically?)

= J S O B (合同特殊工作委員会、GHQ+CIA、1950年3月にはG2キャノン機関中心、ソ連引き揚げ者工作を含む) 再編?

(6) 1952年11-12月、米国新政権 CIA の日本新内閣との公式接触、緒方竹虎の身体検査

File 2-1: (CIA Report No. 00-B-52599); ["Taketora Ogata/Reported Successor to Yoshida/Possible Abdication of The Emperor Hirohito" 1952年6月18日] 天皇退位との関係で、東南アジア旅行中の緒方竹虎が吉田後継になる可能性

File. 2-1 : 「SR REP[CIA 上級代表]から CIA Director 宛 1952年8月28日」吉田の緒方への期待と東南アジア旅行評価

File. 2-1 (ZJJ-185) : 「1952年10月10日 緒方竹虎」緒方の旧軍人・右翼との関係、ノーといえない、決断力不足

File. 2-1 : 「SR REP[CIA 上級代表]から CIA Director 宛 1952年11月7日」極秘・複写禁止 第4次吉田内閣成立後の「日本政府との連絡 (リエゾン) について」緒方官房長官が内閣調査室管轄で CIA を正式招待、CIA への強い関心 [資料3]

資料3 File. 2-1 : 「SR REP[CIA 上級代表ポール・ブルーム]から CIA Director[ベデル・スミス CIA 長官]宛 1952年11月7日」極秘・複写禁止

「1 主題は日本政府との連絡 (リエゾン) について。

2 日本側の招待と私の認可のもとで () は52年11月5日、吉田新内閣の官房長官緒方竹虎と手短かに会見した。会見の目的は、緒方が「米国インテリジェンスのメンバー」であると理解している () と会うことだった。

3 () が、緒方に対して自分は DYCLAIM AFFILIATION[CIA 登録者?]であると自己紹介した時、緒方は諜報活動一般及びとりわけ DYCLAIM への熱烈な [keen] 個人的関心を示した。彼は、DYCLAIM に相当する日本のカウンターパートの組織化を望んでおり、近日中に (おそらく2週間以内に) ワシントンの DYCLAIM について詳しい説明をしてくれれば大変嬉しいと言明した。彼は日本の今日の情

報活動を公然・非公然のどちらの領域でも拡張したいという意向を示した。

4 さらなる説明をという緒方の（ ）へのリクエストについて、私は、非公然活動ではなく公開可能な組織的データのみ説明を許すつもりである。その説明において（ ）は、DYCLAIMの北アジア地域担当上級代表者[SENIOR REPRESENTATIVE=SR REP]を緒方に紹介できると示唆する。それは、吉田[茂首相]との会見まで導くことができると見込まれる。緒方はそのような会見を望むだろうと考えられ、もしそうならば、それは新政府への公式のDYCLAIMとの連絡を開くこのうえない機会を提供すると思われる。

5 緒方側のこのように素早くかつ明確な関心をもつアプローチは、日本側が新政府下において高いレベルでの諜報連絡の継続、いやたぶん、これまで以上の最高レベルの協力を望んでいることを示す、好ましい兆候と見なしうる。」

(注：DYCLAIM というCIA用語を確定する必要 たんにCIAの意味か？ このCIAトップ宛資料は、CIAがその右翼人脈等から疑念を持っていた緒方を、本格的にターゲットにする前提となったと思われる)

File. 2-1：「CIA DIRECTORからSR REP[CIA上級代表]へ 1952年11月10日」上記への返事、緒方で大丈夫か？

File. 2-1：「SR REP[CIA上級代表]からCIA Director宛 1952年11月18日」11月15日会見で緒方情報機関に熱心

File. 2-1：「SR REP[CIA上級代表]からCIA DIRECTOR宛 1952年11月24日」11月19日の緒方宴会、中国情報

File 2-1 (CIA Report No, 消去)；【“Aims and Expansion of the Japanese Intelligence Service” 1952年11月28日】緒方の過去

(7) 会談の直接的効果とアレン・ダレスCIA長官就任、内閣調査室長村井順を通じた工作開始

1952. 12. 28 「朝日」李大統領1月5日来日、クラーク大将(国連軍司令官)招待(初の日韓首脳会談)

1952. 12. 29 「朝日」新情報機関の構想成る、内閣調査室を拡充、予算10億以内に、NHKから海外放送、ねらいは海外情報入手、中共地区邦人送還、政府有田氏(元外相)派遣に、三橋の捜査終わる、鹿地氏との関連持ち越す

1953. 1. 3 「朝日」李・吉田会談、国交開始まず期待、日本側全権派遣も考慮

1953. 1. 3 「朝日」対共情報活動中心の新情報機関、政府の準備進む、

1953. 1. 4 「朝日」新情報機関は言論統制の奥の手か、英紙論評

1953. 1. 8 「朝日」CIA長官ベデル・スミス氏は国務次官に

1953. 1. 10 「朝日」情報機関、内閣調査室を拡充、中央資料室を新設

1953. 1. 12 「朝日」クローズアップ、ベデル・スミス氏

1953. 1. 25 「朝日」中央情報局長官、アレン・ダレス氏を指名(23日に内定)

1953. 1. 26 衆院法務委員会で「鹿地互自供書」公表

1953. 1. 28 「朝日」クローズアップ「アレン・ダレス氏、秘密情報活動に敏腕、対日終戦工作にも努力、昨年暮れ10日間余り東京へ、何のための来日か」/1面ジョン・ダレス国務長官初の外交演説「ソ連は日本を目指す、朝鮮戦もその一環」

File. 2-1 (44-5-2-127, FJJ-19)：「1953年1月30日」「朝日新聞」53年1月10日号の翻訳：情報機関の最終案

<この頃、ワシントンCIA工作調整委員会OSB心理戦略委員会PSB-D27対日心理戦略計画承認、中立主義者や共産主義者、反米感情と闘う、春名『秘密のファイル』上413頁>

File 2-1(FJJ-59)；【“Views of OGATA on Central Japanese Intelligence Agency” 1953年2月6日】

File 3：「CIA Director[アレン・ダレス]から Senior Representative (ハーベイ・オバレシュ?)宛 1953年4月11日」

<「バカヤロー解散」選挙期間中>緒方の2月27日付けアレン・ダレス宛手紙への返事は東京支局から口頭で

File 3：【“Requesting Aid and Assistance in Monetary Loan”1953年5月8日】中国引揚者尋問共同計画とその費用分担

File 3(44-7-25-2, FJJA-380)；【“JCU Monthly Field Comments”1953年5月12日】日本版CIA計画は新聞で悪評

File 3(44-2-0-114, TOKY-0144, IN-47728)；【“Repatriation Program from China”1953年5月19日】国務省経由で中国引揚者尋問

の費用負担 750-1850 万円、実際には内閣調査室が保安庁・公安調査庁・国家地方警察と協力し実行、米側へ情報提供
 File 3(Reports R-64-53): 【From OARMA, JAPAN "Taketora OGATA" s Views on Rearmament"1953年6月15日】緒方 MSA 再軍備観
 File 4: 【"Contact Report" 1953年7月20日4頁】1953/7/12 帝国ホテルパインルーム昼食会、出席者: 緒方、(村井)-(ガーゲット?)() ()、日米共同のPW (心理戦争) 案を村井と () で。村井は今夏 MRA 大会参加、帰路米国へ

<1953.8.8 吉田・ダレス会談、防衛力・基地問題、ジョン・ダレスのクリスマス・プレゼント=奄美返還・沖縄基地化>
 File 3: 【"Progress Toward a Japanese Central Intelligence Organization"1953年8月14日】吉田は緒方登用、自由党内反発
 File 3(200-723-1066, FEC/MIS Intel. Sum. #4022): 【"FEC/MIS Intelligence Summary -Daily" 1953年9月13日】「政治報告—防衛政策未決定、新計画は遅れる」緒方の新防衛計画に佐藤栄作幹事長ら反対し棚上げ
 <『時事新報』(当時「産業経済新聞」資本下) 9月17(吉原は23) 日村井順の闇ドル没収スキュンダル報道>
 <1953.9.20 「朝日」村井内閣調査室長報告、3000 ドル没収は誤報、9.22 「朝日」村井室長帰る、闇ドルは誤報>

[資料2] 1953年9月24日、アレン・ダレス CIA 長官から吉田茂首相、緒方竹虎副首相宛親書

(1) 松本清張・吉原公一郎らの「内閣調査室長村井順闇ドル更迭事件」の真相を語る資料
 (加藤哲郎仮訳、印刷不鮮明で、解読も困難をきわめた目立たない資料であるが、内容は米国中央情報局長官から日本国首相・副首相への公式親書であった)

<『時事新報』(当時「産業経済新聞」資本下) 9月17日村井順の闇ドル報道>
 <1953.9.20 「朝日」村井内閣調査室長報告、3000 ドル没収は誤報、9.22 村井室長帰る、闇ドルは誤報>

銀行帰りの夫人襲われる

騒がれ何も取らず二人組逃走

午前十一時四十五分ごろ
 吾妻区西横町五七七小路
 藤の東京銀行上野支店一交
 守人氏一で、同町四五真
 空社事務鈴木祐一氏警動木
 んをもが会社の預金百四十
 万を出して、同町三蔵事務所
 設を下りかけたところ、後
 尾二人連れれの男がコンヤ
 ンに収容された鈴木祐一さん

いさよとでもおどろかすとい、スリ前
 野郎、襲撃し奪って去った
 六回といはれぬほどだ。

また百円単位の新井里車
 の第一決着新進の新井里車

「ようもので、おまをなされたが
 鈴木さんが騒いだので、二人連れ
 は何も取らずに逃げた。
 鈴木さんは近々の付内閣調査取
 扱されたが、金指三蔵の警
 二人連れは暗黒界にまた五尺五
 寸ぐらい、三十五、六歳の男と
 白ロイヤルツの服で、上野署で
 捜査中だ。」

同町三小倉思慮館館長の証
 木さんの証をきいて、暗黒だか
 けつげが、犯人はもう逃げた
 た。社内には十人ぐらいの者が
 だが、既はその中にまじって鈴木
 さんの金をもつたのまじって後
 をつげたものであつた。

ヤミドルはデマ
 村井室長帰る

内閣調査室長村井順氏、二十
 三日午後五時五分パンナムスリ
 カン機で羽田着陸した。同氏は
 ロンドンで滞り不申告の事、三
 年ほど没収されたといわれ
 ていたが、報道は誤りで、出
 迎えたが、同氏は
 「とんでもないデマだ、さ
 すが信じられた。暗黒に
 ハンマイキで入らされたん
 だ。この国で暗黒界の
 のパスをもつた人がそんな不
 法行為をしても暗黒界に上ら
 ないで、と聞くと」

東京新橋
東横のれん街

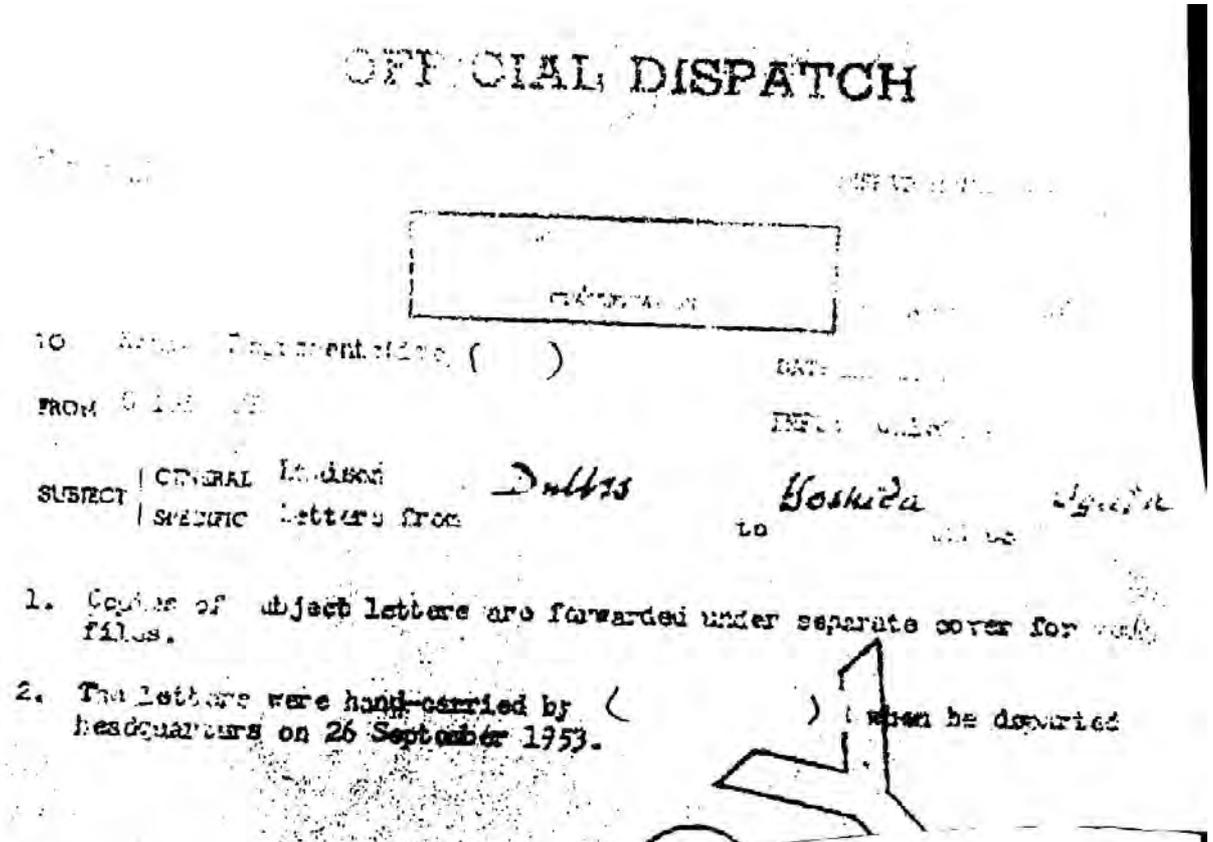
北ノ洋林

大相撲
 秋場所

立 大 00000
 大 00000
 立 大 00000
 大 00000

立 大 00000
 大 00000
 立 大 00000
 大 00000

- [アレン]ダレスから吉田、緒方への手紙 1953年9月26日に(ガーゲット?)がCIA本部を出発する際に携行された。



- File 3【公式親書 CIAアレン・ダレス長官から吉田首相へ、1953年9月24日】

日本国首相、親愛なる吉田へ

貴政府の内閣調査室長村井順氏と最近再会し、相互の関心と問題について討論する機会を持ったことは、大きな喜びとするところである。ワシントン滞在中の村井氏と私および私のスタッフ・メンバーとの会談が、共にたずさわっている重要な事業において、何らかの助けになればと願っています。

あなたと緒方氏と村井氏が、あなたの国における私たちの代表者に示された協力は、最も重要で実際に実り多いものと私は見なしていること、確立された継続的で卓越した関係を私が楽しみにしていることを、確言します。

長官 アレン・ダレス

- File 3【公式親書 CIAアレン・ダレス長官から緒方副首相へ、1953年9月24日】

日本国副首相、親愛なる緒方へ

日本政府の内閣調査室長村井順氏とワシントンで最近会見する機会を持ち得たことは、私の大きな喜びとするところである。村井氏と私および私のスタッフ・メンバーとの会談は、我々が共有する相互の問題と関心を理解する上で、確かにもっとも有益なものであった。それが村井氏にとっても、何らかの有利になることを、われわれは願っている。

Overesch 海軍大将[ハーベイ・オバレシュ第二代 CIA 東京支局長]は、最近の彼のあなた及び村井氏との会談について知らせてくれた。私はこの機会に、私のスタッフはあなたがたずさわっている

重要な努力についていつでもあなたを助ける用意があることを確言いたします。

長官アレン・ダレス

28 September 1954

His Excellency
The Prime Minister of Japan

Dear Mr. Yoshida:

It was a great pleasure to have the recent opportunity to meet again and discuss with Mr. Jun Murai, Chief of the Research Chamber of your Government, our mutual interest and problems. I sincerely hope that the conversations Mr. Murai had with me and members of my staff while in Washington will be of some small assistance in the important undertaking in which he is engaged.

Please be assured that I consider most important and mutually fruitful the cooperation which you, Mr. Otsu, and Mr. Murai have extended to my representatives in your country, and that I look forward to continuation of the excellent relationships which have been established.

Sincerely,

s/
Allen D. Dulles
Director

24 September 1953

His Excellency
The Deputy Prime Minister of Japan
Tokyo, Japan

Dear Mr. Ugata:

I should like to take this opportunity to express the great pleasure I had recently in meeting in Washington Mr. Jun Murai, Chief of the Cabinet Research Chamber of the Japanese Government. The conversations Mr. Murai had with me and members of my staff were certainly most beneficial in our understanding of the mutual problems and interests we share, and it is our hope that they were of some benefit to Mr. Murai.

Admiral Overton has advised me of his recent conversations with you and Mr. Murai, and I wish to take this opportunity to assure you that my staff stands ready to assist you in the important endeavor in which you are engaged.

Sincerely,

s/
Allen D. Dulles
Director

★ 加藤注：村井順の訪米とダレス CIA 長官及びスタッフとの懇談への礼状で、東京で手交される親書。この時村井順は、外務省と英国 MI6 の妨害で、アメリカからロンドン空港に入ったさい、3000 ドル（当時約 108 万円）の闇ドル所持が発覚し、『時事新報』（当時「産業経済新聞」資本下）9 月 17（吉原は 23 日？）日でスキヤンダルになったばかり。村井訪欧自体が内閣調査室の中央情報局昇格と吉田茂「親書」をアレン・ダレスに手交するための会見とされ、松本清張も吉原公一郎も村井は外務省とイギリス諜報機関の妨害で失敗し CIA ダレスとの会談はなかったかのように描かれているが、このダレスの吉田・緒方宛て親書は、春名『秘密のファイル』（上 402 頁）が村井に同行したジョージ・ガーゲット CIA 東京文書調査課長の証言から述べたように、村井はアメリカでダレスと会見し使命を果たしたこと、マスコミや国会で問題にされている村井をダレスはあくまで支持し擁護したことを示す。吉田宛と緒方宛親書で文面が微妙に異なる。年末閣議で緒方は村井再任を主張したが、吉田は村井を解任し転勤、翌 54 年 1 月から木村行蔵が第 2 代室長。

(2) 村井は（スイスでなく）ワシントンでアレン・ダレスと会い、忠実に任務を果たしていた。しかし英国 MI 6 への連絡不足？でロンドン空港拘束、日本の外務省（曾野明）がそれをマスコミへ流し闇ドル・スキヤンダルに。緒方副総理は村井を擁護したが、緒方・村井の内閣調査室を快く思わない福永官房長官・外務省が村井更迭を主張。吉田が最終的に村井更迭決断。

(3) 村井の「吉田親書」持参は確認できないが、ダレス長官ら米国側は村井に満足し擁護。そのためわざわざ吉田首相・緒方副首相に公式親書（文面の違いに注意）。しかし緒方は村井を守れなかった（アメリカ側の評価）。

File 3 【JCU Report No. 233-607? /1953 年 10 月 9 日頃、日付なし】正力がテレビ利権と引き替えに緒方への協力提案

File 1 (File No. 44-7-16-86); 【"Offer of Yamiuri Support to Proposed Information" 1953 年 10 月 16 日】正力の使者高野

File 3 (201-24404, JACO-1300, IN-28628) 【"Fictitious alleged incidents on European tour" 1953 年 10 月 23 日】福永健司官房

長官が吉田首相に取り入り内閣調査室の管轄権要求、ワシントン・緒方に近い村井順の更迭を画策

File 3 【緒方竹虎の影響力衰退、1953年11月12日】福永の吉田・重光会談 set に緒方つんぼ機敷、読売の反緒方攻勢。

File 3 (201-24404, JACO-1433, IN-42763) 【" MURAI Jun" 1953年12月17日】福永・曾野の反緒方・村井失脚策動

File 3 (201-24404, FJJ-452) 【" MURAI Jun and the Black Market Dollar Incident" 1953年12月21日】吉田の村井解雇決断

資料4 File 3 (File No. KAPOK, JACC1491/In-47197) : 【1954年1月7日, 1955. 10/18再録】

() からの電文、以下が要約。

「1 緒方竹虎副総理の招待で、(ジョージ・ガーゲット CIA 日本 DRS 文書調査部長) は、1月5日夕に緒方及び村井と夕食を共にした。

2 夕食の名目は、緒方が、中国及びソ連からの日本人引き揚げ者について、米国側の情報上の関心がどうであるかの明瞭な構図を得たいということだった。(ガーゲット?) の解釈によれば、この会合の本当の目的は、ASCHAM[アレン・ダレス CIA 長官]と(ハーベイ・オバレシュ 第二代東京支局長・上級代表?) に対して、村井の最近の内閣調査室長の地位からの更迭が、緒方側からの KUBARK[CIA] への態度の変更と解釈さるべきではないと、間接的に請け負うことであった。以下の点が、この解釈を支持するように見える。

A 緒方は、村井の最近の渡米のさいに、彼に示された多くのもてなしと親切に、深い謝意を示した。緒方はとりわけ、村井に対して KUBARK の活動についての詳細な説明を提供してくれたことに示される、KUBARK の日本政府に対する信頼に、満足の意を表した。

B 緒方はとりわけ、村井の内閣調査室からの更迭は、内閣調査室の諸活動の目的を変えるものではない、と声明した。

C 緒方は(ガーゲット?) に、新室長が選ばれるまでの内閣調査室に関わる日常作業の扱いについて話し、その間は、何か緊急の問題がある場合には、緒方自身に直接電話するようと言った。

D 緒方は、年末の忙しい仕事で、(オバレシュ?) のアメリカ帰国前に() と会えなかった事実についてお詫びした。彼は() の日本帰国後できるだけ早い会見を楽しみにしていると述べた。

E 緒方のこの晩全体の態度は、以前にも増して暖かく、誠心誠意のものだった。

3 日本人引き揚げ者の訊問についてコメントするさいの前置きに、緒方は要するに、アリソン大使が「国務省、KUBARK[CIA]、日本政府による拡大共同安全保障団(expanded joint security force)」が引き揚げ者訊問計画を実行するという案をもって彼に接触してきたこと、そのさいもしも日本政府がそのような計画のための資金を持っていないのならアメリカ側が資金を提供できると言っている、と述べた。緒方は、この問題を吉田首相と岡崎外相とざっと議論しそのための「ある程度の共同拡大」については同意した、しかしアメリカ大使館に返事をする前にこの機会に() の見解を得たいと、緒方は言明した。

A (ガーゲット?) は、(非公式で個人的なものとして)、中国及びソ連からの引き揚げ者の持つ情報の高度な潜在力と価値は米日両国の情報サービスにおいて大きな重要性を持つことを強調し、この潜在力をフルに活用するには、日本人引き揚げ者に対する日本側の訊問に米国側機関が直接アクセスできるのが最善である、もしもこれが政治的圧力で妨げられるのなら、引き揚げ者から最大のものを引き出すためにあらゆる手段が講じられるべきである、と返答した。

B 緒方は、米国は攻撃戦用にソ連や中国に関する情報を集めることに関心を持っているのかどうかと尋ねた。(ガーゲット?) は、この地域での米国の軍事諜報は、FEC[Far Eastern Commission, 極東委員会?]の安全保障上の責務に由来するもので、いかなる領域でも攻撃戦用の情報収集には関心を持っていないと答えた。

C (以下を見よ)

D 緒方は、アリソン大使の拡大引き揚げ者計画には何か隠された目的があるのか、と尋ねた。(ガーゲット?)は、それはたぶんないだろうと答えた。

E (ガーゲット?)は、引き揚げ者訊問における日本側の最大の諜報上の関心は何かと尋ねた。緒方は、日本は中国ないしソ連で軍事的防衛行動はできないのだから、日本の関心は政治経済領域に限られる、と答えた。

F 緒方は、この問題がより完全に理解できたと感じる、と述べ、吉田首相、岡崎外相と相談したうえで、日本政府の立場を米国大使館に個人的に示すつもりだ、と述べた。彼は、引き揚げ者計画において米国の情報機関を助けたいという希望と熱意を示した。

4 緒方は、米国は中国及びソ連のスポット爆撃目標 (spotting bombing targets) に関心があるかと尋ねた。(ガーゲット?)は、もちろん我々は関心はあるが、それはこれらの領域からの攻撃に対して防衛しなければならない場合のみである、と答えた。」

(注：緒方四十郎氏提供「緒方竹虎日記」1954年1月5日に「夜、帝国ホテルにてガーゲット」とあるため、ジョージ・ガーゲット CIA 日本 DRS 文書調査部長と推定できる)

★ 日本版 CIA 構想と内閣調査室については、松本清張の小説『深層海流』(1962年)とそのもとにもなった「現代官僚論・内閣調査室論」(1964年7月)が有名で、ロッキード事件期にもこの期のことが振り返られた。最新の大森義夫『日本のインテリジェンス機関』(文春新書、2005)には、以下のように出てくる。

「内調の前身・内閣調査室が三十人ほどの人員で設置されたのは1952年4月で、内務省採用の村井順氏が吉田茂総理、緒方竹虎副総理を熱心に説いて賛同を得た。最初の構想は雄大で「治安関係者だけでなく、各省各機関バラバラといってよい内外の情報を一つにまとめて、これを分析、整理する連絡機関事務機関を内閣に置くべきだ」と吉田総理が閣僚座談会で発言している。

意気込んだ当初の構想が挫折し、矮小化されたのには二つの理由がある。一つはよき理解者であった緒方竹虎さんが1956年に亡くなったことである。朝日新聞出身で戦時中の情報局総裁をつとめたこともある緒方さんは「外務省、国警(いまの警察庁：筆者注)などの同種機関とは全く独立し、総合的な情報活動を行う。各官庁からの情報を収集し内閣調査室の集めた情報はすべて関係各省に流す」と抱負を語っている(毎日新聞・1953年1月10日)。緒方さんは総理を目前にして急逝した。緒方さんの後、日本の政治家たちは情報(インテリジェンス)に目をつぶって半世紀すぎたが、最近にいたってようやく本来の主張が見られるようになった。もう一つの理由は内閣調査室の運営をめぐる内務省系(警察)と外務省との間で激しい主導権争いが闘われたことで、結果は初代室長村井順さんの失脚にまでおよんだ。霞ヶ関の各省相克は時として絶望的なくらい深刻である。日本の情報組織発展を妨げている要因の一つが役所間の縄張り争いであることは今日まで変わっていない。」(pp.36-37)

★インターネット情報：「盗作作家」松本清張が記録から“抹消”したもの……

さらに、取材を進めると、「深層海流」に“抹消”された個所があることがわかった。「深層海流」(昭和37年11月20日発行)は、そのまま「松本清張全集31」(昭和48年9月20日発行)に収録されたが、そのときには、くしばらくしてから、この問題について「解説」がある新聞に掲載された。「(中略：筆者)日本の情報機関について、当時、村井案、緒方副総理案、吉田首相案、それに大手通信社系案[元同盟通信社長古野伊之助の作成した案。同盟通信は共同通信の前身]の四つがあった。これについて、村井氏は、(西独滞在中の：筆者補足)アメリカのCIA長官アレン・ダラスか、もしくは、その最高スタッフに会って意見を聞くため外遊についたという。ところが、調査員のなかに村井氏の外遊の目的を知っている者がおり、これがソ連機関員を通じて流された。……>など、P.60下段からP.61下段までの以下30行がまるまる削除されていた。なぜか? その理由をさぐるため、削除個所の内容を追ってみると、たしかに、村井は“外遊”をしていた。53年8月10日、村井は「各国治安および情報機関の現況実情調査のため」という目的で、ラングーン経由、スイス、西独、フランス、イギリス、アメリカ、イタリア、スウェーデンを回るとして、外交官旅券を申請。9月15日、民間割当の602ドル50セントを受けた。「深層海流」には、村井の側近・工藤真澄(小説中では有末普造)との、会話がある。<「出張の名目が早く伝わったんじゃないでしょうか?」「いや、おれはそんなへまなことはいわないよ。遊びだ。遊びでヨーロ

ツッパを廻ることにしてある」村井順のその意味は、やがて旅券の申請で判った。それに書かれた旅行目的は、世界的宗教団体の大会に出席するという理由だった。 たしかに、村井順はMOAの会員である[村井はMRA (Moral Re-Armament、道徳再武装運動)の会員。同団体は38年にアメリカ人のフランク・ブックマン博士が提唱。その主張は武器による再武装では平和は得られない、武器ではなく道徳で再武装しなければならないというもの。右翼系宗教団体である]>(P.56) が、慎重をきしていたはずの村井に、突如としてスキャンダルが持ちあがる。外務省情報文化局課長の曾根[野]明が、ボン大使館二等書記官の上川洋から送られてきた“私信”の内容を新聞記者たちに流したためだった。“私信”の中身はこうだ。—村井は“米諜報部最高責任者(ダレスCIA長官)”と極秘にボンで接触する予定だったが、“英国諜報関係者”に接触を妨害され、それを果たせなかった。何者かが、ホテルに残しておいたトランクを探索され、上着の内側を切り中を調べた痕跡が残されていた。これを「時事新報」(9月23日付)がそのまま伝え、その後は、「ボン郊外のワーン空港で、村井の腹巻の中からヤミの3000ドルが見つかった」という噂まで飛び出してしまった。先に上げた「深層海流」の削除箇所は、このスキャンダルの詳細を語る部分だった。

それでは、削除理由は何か？ 結論からいえば、この箇所は55年7月30日に発行された「赤い広場 霞ヶ関 山本ワシントン調書」(20世紀社)の盗作だった。同書の著者は元読売新聞社会部の三田和夫。東京租界で暗躍するギャングたちに食い込み、ロシアのスパイ集団の内幕を暴露し、白木屋事件のトラブルで横井英樹を銃撃した、安藤組一味を匿ったため犯人隠避で逮捕され、新聞社を去った伝説の事件記者だった。三田は今でも“79歳の現役記者”を自称し、ホームページまで持っていた。私 がメールで連絡すると、さっそく電話をくれ、「赤い広場」のコピーを送ってくれた。同書を「深層海流」と対照してみると、削除箇所が「赤い広場」の丸移しだった。また、村井順に関する記述のほとんどが同書のパクリだった。が、その反対に、「深層海流」は「赤い広場」が暴きだしたソ連のスパイ活動については、黙殺している。それは、松本清張が共産党シンパであることと無関係ではあるまい。たとえば、日暮信則について……。日暮信則は、当時、外務省から内閣調査室情報部海外第一班(対ソ情報)に出向し、村井順の下で働いていた。外務省では欧米局第五課課長補佐。“私信”を公開し、村井の足を引っ張った曾根[野]明の側近だった。話は、'45年8月まで遡る。終戦直後、モスクワでは、佐藤尚武大使など大使館員やその家族60余名と、朝日、毎日、共同の3特派員が、大使館内に軟禁されるという事件があった。このとき、東京外大ロシア語学科出身者が集まって「新日本会」という会ができた。中心となったのは5人。「赤い広場」によると、それは、<毎日渡辺三樹夫記者(東京外国昭八卒)、朝日清川勇吉記者(同昭十三卒)、日暮信則外務書記生(同昭八卒)、庄司宏外務書記生(同昭十三卒)、大隈道春海軍書記生(同昭十二卒)であった>という。当時、この事件取材した前出・三田は、「彼らはスパイになった。いや、新日本会の5人だけでなく、当時、モスクワ大使館にいた全員が、スパイなることを強要され、誓約書は書かされたはずだ」と語っている。実際、この中から、2人の逮捕者が出ている。ひとは日暮で、もうひとは庄司(逮捕時は外務省国際協力局勤務)。彼らは、アメリカに亡命したラストロヴォロフが、ソ連領事館勤務時代に、機密情報を渡していた。内調とその周辺は、そこら中スパイだらけだった。この事件で、警視庁に自首した志位正二(元関東軍情報参謀少佐)もしかり。志位は、郵船ビルの歴史課グループの一員でありこの当時は内閣調査室に嘱託として働いていた。そして、また、志位にもシベリア抑留の体験があった。

<http://www.asyura.com/sora/nihon1/msg/3.html>

File 3(File No. KAPOK)；【1954年1月7日】()からの電文「1 緒方竹虎副総理の招待で、(ジョージ・ガーゲットCIA日本DRS文書調査部長)は、1月5日夕に緒方及び村井と夕食を共にした。夕食の名目は、緒方が、中国及びソ連からの日本人引き揚げ者について、米国側の情報上の関心がどうであるかの明瞭な構図を得たいということだった。(ガーゲット?)の解釈によれば、この会合の本当の目的は、ASCHAM[アレン・ダレス]と()に対して、村井の最近の内閣調査室長の地位からの更迭が、緒方側からのKUBARK[CIA]への態度の変更と解釈さるべきではないと、間接的に請け負うことであった。」→村井転勤、1月29日ラストボロフ事件発覚、緒方は単身でCIAに協力・造船疑獄対処しなければならなくなった。 [資料4]